HYUNCKEL & MAAM

記念日＜summer＞　Hyunckel＆Maam

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=17920568

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, 原作終了後

Twitterにあげていた超短文のうち「記念日」がテーマになっているヒュンマ作品をまとめたもの。
分かりやすいように、物語中の時系列に合わせて並び替えてあります。
厳密に言うと、「プロポーズの日」から前の作品は、シリーズ的には「村のくらし」よりも前の時間軸の作品ですが、置き場に迷ってここに入れました。

このタイプの作品は、また溜まったら、CPごとにまとめていきます。

2022.06.03～06.22　Twitterに投稿。
2022.07.09　ヒュンマスターフェス合わせで再編集。

記念日＜summer＞　Hyunckel＆Maam

ローズの日　　６月２日　カール王立植物園にて

恋人の日　　６月１２日　リンガイア北部山中にて

プロポーズの日　　６月５日　何処かの地で

夏至　　６月２１日　リンガイア北部山裾の町にて

海の日　　７月１８日　パプニカ西部岸壁の町にて

ローズの日
　先生に案内してもらった王立植物園は、広大な敷地に、豊かに木々が生い茂っていた。
　その奥の方に、少し趣が違う庭があった。

　蔦のように這う枝に、首を傾げるように咲く大輪の花。
　薔薇園だった。

　見てくださいマァム、と先生がその一角に私を案内する。
　そこには、他の薔薇とは少し離され、すくっと立った、１本の薔薇があった。
　それは、初めて見る色をしていた。
「青い薔薇は咲かせるのが難しいんですよ。
　やっと１本、咲いてくれました。」

　青い薔薇。

　先生はそう言ったけれども、私はその気高く、儚い色に、ある人の姿を思い浮かべた。
　誇り高き、孤高の戦士。

この薔薇は、その人の魂と、同じ色に思えた。
　心の中で呼びかける。

　ヒュンケル、あなたの色ね。

写真　Ac　photo様

恋人の日
　その地は、雪深く、冬が長い。

　この日も、外は、厚く雪が積もっていた。

ほとんど雪の降らない地方で育った私には、雪の上は歩きにくくて仕方がない。
　積もったばかりならともかく、一晩経つと、固く凍ってしまう。
　足を取られて、怖いくらいに、よく滑る。
　私は、慎重に、足を進めた。
「マァム。」
　呼びかけられて顔を上げると、私の前に手が差し出された。
　見ると、彼が、優しい眼差しで、私に左手を差し出していた。珍しいことに、ほんの少し、その頬が染まっているように見えた。
「ありがとう、ヒュンケル。」
　私は、ぎゅっと、彼の左手を右手で握った。
　きっと、私が歩きにくそうにしてるから、手を差し伸べてくれたのだろう。
　そうはわかっていても、嬉しかった。
　私の頬も、少しだけ赤くなる。

　そうやって、彼に手を引かれているうちに、私の方も歩き慣れてきた。
　もう滑らないだろう。
「もう大丈夫よ、ヒュンケル。」
　いつまでも手を引いてもらうのも悪い気がして、そう言った。
　すると、彼は足を止めて、私を振り返った。
　その真摯な眼差しに射抜かれ、私はどきりとした。
「俺が、こうしていたい。」
　彼は、ひとこと、そう言うと、また前を向いて足を進めた。
　私の手をぎゅっと握ったまま。
　彼の左手に、ほんの少し、力が込められたのを感じた。
　私の頬がますます赤くなる。
　つないだ手から流れ込むように、彼の気持ちが伝わってくるような気がした。
　きっと、私の思いも、同じように伝わっているのだろう。

　思いを伝え合えるって、こんなにも、幸せなことだったんだ。

写真　Ac　photo様

プロポーズの日

　俺の人生は、あのとき終わるはずだった。戦いに敗れた戦士の末路は一つしかない。

　だが、お前はそれを許しはしなかった。

　お前の手から返されたのは、卒業の証だけではなかった。

　俺はあのとき、かたちなきものをお前から受け取った。

　誰かを大事に思うこと。

　ひとを愛おしく思うこと。

　お前から与えられたちいさな種火は、俺の中で、次第に大きな炎

となっていった。
　そして、お前から受け取った何かを、俺はまた、他の者に渡してゆく。
　そんな生き方が俺にできるとは思わなかった。
　それも、お前に出会えたからだ。

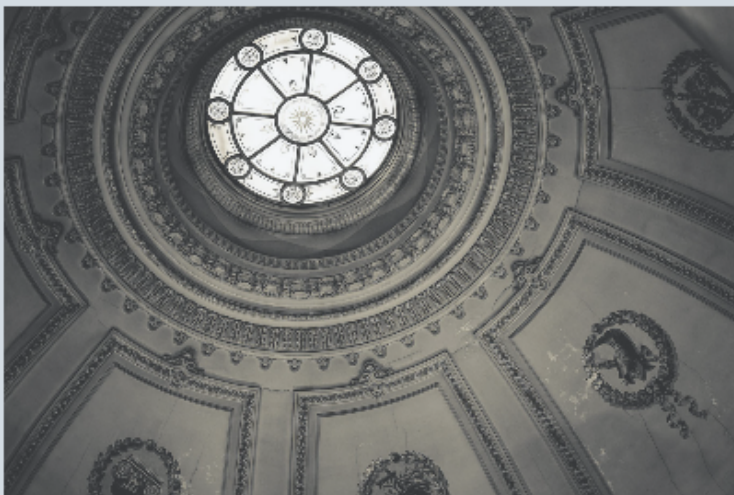
　俺のすべては、お前とともにある。
　だから、ひとつだけ、俺にわがままを言わせてほしい。

「お前とともに、生きていきたい。」

プロポーズの日

俺の人生は、あのとき終わるはずだった。戦いに敗れた戦士の末路は一つしかない。
だが、お前はそれを許しはしなかった。
お前の手から返されたのは、卒業の証だけではなかった。
俺はあのとき、かたちなきものをお前から受け取った。

誰かを大事に思うこと。
ひとを愛おしく思うこと。
お前から与えられたちいさな種火は、俺の中で、次第に大きな炎となっていった。
そして、お前から受け取った何かを、俺はまた、他の者に渡してゆく。
そんな生き方が俺にできるとは思わなかった。
それも、お前に出会えたからだ。

俺のすべては、お前とともにある。
だから、ひとつだけ、俺にわがままを言わせてほしい。

芳流（kaoru）

プロポーズの日

「お前とともに、生きていきたい。」

芳流（kaoru）

文庫メーカー

夏至
　北の大地の短い夏は、沈まぬ太陽に祝福されている。
　その日差しを少しでも頂くがためだろうか。夏至の夜は、街中が祭りの喧騒に酔っていた。

　露店で買ったジンのグラスを喉に流し込み、ヒュンケルは空を仰いだ。
　普段なら、既に眠りにつく時間になっていたが、この北限の街では、大地に帰ろうとしない太陽が、仄かな明かりを地上に投げかけていた。
「この国は・・・こんなに明るかったんだな。」
　ヒュンケルは、かつて、この国で暮らしていた冬の記憶を思い起こした。
　あのときと同じ街を見ているはずなのに、何もかもが明るく見える。
　それは、ただ季節の違いだけではないだろう。

「あ、見て！ヒュンケル。」
　彼の隣でマァムが、屋台の一つを指さした。
　見ると、花冠や花束を売っている店だった。
　ふたりで、屋台の前まで行くと、マァムは、しゃがんで花冠を見ていた。
「かわいい～素敵ね！」
「花束もあるな。」
「うん。それも素敵。
　でも、私にはいいの。」
「そうなのか？」
「うん。
　その花束はね、夏至の日の夜に、その花束を枕の下に入れて眠る

と、未来の旦那さんと夢で逢えるんですって。
　私はもう・・・出会っているからいいの。」
「そうか・・・。
　なら、これはどうだ？」
　ヒュンケルは、そう言うと、花冠をマァムの頭にふわりと乗せた。
　紫とピンクの花で編まれた、自然のサークレットだった。
　マァムはいったん手に取り、そして、その花の色を認めると、その意味に気付いた。ほんのりと頬を染め、またそれを頭に載せた。
「気に入ったのなら、買おうか。」
「ありがとう、ヒュンケル。」
　そう言って、マァムはヒュンケルに手を伸ばした。
　ヒュンケルが、その手を握り返す。

　二人の握られた手を、白夜の灯りが包んでいた。

写真　Ac　photo様

海の日
「私、内陸育ちだから、海ってあんまり見たことなくって。」
「俺も先生に見せてもらったのが最初だった。」
「きれいね。いいお天気でよかった。」
「ああ。」

「前にね、ここに来たとき、貴方と一緒に見たいなあって思ったの。
　だから、今日は一緒で良かった。」
「それなら、また来るか。」
「いいの？」
「ああ。
　また一緒に来よう。
　何年経っても、いくつになっても、な。」

「私、内陸育ちだから、海ってあんまり見たこと
なくって。」
「俺も先生に見せてもらったのが最初だった。」
「きれいね。いいお天気でよかった。」
「ああ。」
「前にね、ここに来たとき、貴方と一緒に見たい
なあって思ったの。
だから、今日は一緒で良かった。」
「それなら、また来るか。」
「いいの？」
「ああ。
また一緒に来よう。
何年経っても、いくつになっても、な。」
芳流（KAORU）